

南三陸町 つながる 未来通信

No.6



このニュースレターでは、
様々な仮設住宅やまちで南三陸町の方々が取り組まれている
元気の出る活動を紹介し、
これから暮らしづくり・まちづくりに向けて、
皆さんがこのまちで大切にしていきたいと思っていることを
私たちなりに発見し、継りたいと思っています。

発行元：NPO 法人コレクティブハウジング社

おじゃましてきました！ 椿-花咲く町づくりWS

8月4日、南方町仮設住宅第1集会所で行われたワークショップが開催されました。テーマは「椿-花咲く町づくり」。会場は総勢60名以上の人で活気に満ちあふれ、日本造園学会の先生方、学生のみなさんの進行のもと、住民の方たちから椿や花のある町の思い出や、町の未来像についてお話をうかがうことができましたので、その一部をご紹介します。

ワークショップ運営：京都造形芸術大学環境デザイン学科、佐々木葉二・河合健研究室



椿のある風景

について語り合いました

- ・畠のまわりの椿
- ・水辺に落ちた椿の花
- ・上ノ山公園
- ・上山八幡宮
- ・土手の椿
- ・雪の中の椿
- ・海沿いの、ツバキのじゅうたんの散歩道
- ・避難所で見た椿が忘れられない。
- ・入谷の山の椿やサザンカ

遊ぶ椿

- ・椿の木で子どもたちは木登りをした。
- ・椿の実の油を出して、笛を作つて遊んだ。

油の使い方

- ・昔の人は椿油を作り、お化粧や食用に使つた。
- ・実がなるのは、ヤブ椿。
- ・椿の油も食べたよ。昔は何もないから。

- ・東山公園や松原公園でお花見

- ・志津川駅の裏にひまわり畠。
- ・田東山のやまつづじ

いろいろな花のある風景

- ・家の前のツツジ
- ・小学校の桜
- ・道や駅前の花壇
- ・ボケやカリンは、実ができたらお酒に漬ける。
- ・南方町の千本桜

日常の中の椿

- ・根つけした椿があつた。
- 50年寄り添つた大切な木。
- ・白色の椿が珍しくて、分けてあげた。
- ・枝を折つて、仏壇にかざつた。

椿あふれるまちづくり

を考えました

●花いっぱいの町に

- ・志津川中学校も、桜並木に。
- ・45号の川沿いに桜があつたらいい。
- ・駅裏にひまわりがあつたらいいな。
- ・八幡側は両サイドに、入谷まで花を植えたい。
- ・45号線にはサルビアとマリーゴールドをずらーっと！

●公園がほしい

- ・駅前や宅地のそばに新しい公園がほしいね。
- ・東山の眺めがいいところにも、公園を。
- ・今役場があるところに公園がほしい。
- ・水尻川沿いにも公園を。
- 椿をいっぱい植えて夏になつたら涼めるように。

●こんなところに椿を植えたい！

- ・山際の杉を取つて、実のなるヤブ椿を植えでは？
- ・海沿いにも椿を植えたらいいかな。
- ・ベイサイドアリーナから海岸にでるところに椿と桜を交互に植えたい。
- ・新井田川の両サイドに、椿と桜を交互に植えたい。
- ・小学校と高校から防災庁舎をつなぐ道に、避難経路の目印で椿を植えたい。

(川上英里)



南三陸町の〈風景〉が語りかけるもの

写真は、椿島の「成熟した森」。
枝葉が空間を住み分け、その隙間から太陽の光がこぼれている。

NPOコレクティブハウジング社南三陸支援チームと活動と共にしてくれている文化人類学研究の丹羽朋子さんと共に、先日、波伝谷仮設住宅にお住まいの後藤一磨さん（復興まちづくり推進員）にお話を伺いました。
私たちの活動テーマである「まちづくり」ってなんだろうという問い合わせに「風景」という一つの視点を与えてくださいました。

■形ある物を超えて共有される〈風景〉

「大津波を受けたこの風景は、同時代を生きる全ての人々のものです」
語り部、後藤一磨さんの言葉に目を開かれた。〈風景〉とは何か？「主観的な景色、自然をさす」と辞書にはある。今夏、志津川のまちの商店跡に、「きりこ」の手法で各店の記憶やシンボルを描いた白い看板が並んだ。この通りで暮らしを営んできた方々の目には、かつての懐かしい町の営みの風景が重なったに違いない。誰かしらの所有物である「土地」「建物」とも、客観的で人工的な景色を意味する「景観」とも違う。〈風景〉とは、個々の形ある物を超えて、ひとりひとりの記憶や想いと往来しながら、みんなで共有するものなのだ。

■慣れ親しんだ〈風景〉の拠り所(よりどころ)

「僕には壊れたふるさとがある。」工藤真弓さんの4歳の息子さんは志津川のまちを見てこう言つたそうだ。わが子の言葉は「何もなくなつたけどそこがある」という実感があるのは希望。見える見えないじゃないと思った」というお話が心に残る。「形あるものは津波で流れた。無形のものこそが、震災の前と後をつなげる」といつて、祭りの復活に尽力した方にも出会つた。

めぐる季節の行事や祭りの集い、ある場所や海がもつ匂い、熟練の技術、暮らしの営み、記憶や自然……みな、明確な輪郭や決まった所有者のないものだ。だからこそそれらが作る〈風景〉ははかなく、お御輿や正月の才

南三陸へ愛をこめて

南三陸町に通い始めて1年余、素敵人たちとの出会いは訪問の原動力。でも時に不思議な体験も在ります。／都市計画案を閲覧するために新しい役場に行った。閲覧する机もイスもなく不思議な風景。新庁舎は整然とした分そ分けなく、カウンターの向こうとこっちの町の人がコミュニケーションしにくい雰囲気。「僕のふるさとはこわれた志津川」と5歳のUくんに言わせるこの非常時、役場に

はもう少し“コモン”的なやさしさがほしい。／平成の森の野球場の奥に“迎賓館”という集会施設があるというので興味深く訪問。かなり手の込んだ建造物。活用策を訊ねると、使いこなせず“こまつた”ものらしいのです。必要なものをニーズに応じて支援する私たちのモットーからすれば、かなりの不思議。／伊里前の商店街の裏山を上がっていくと小学校と歴史資料館が在りました。そのアクセス部に木造建物。ハーバード大学主導の集いの場…のようです。周辺で草刈をしていた地域の方は、口をそろえて、通学バスのスペースが狭くなり、使い道も不明で“こま

カザリ、シロウオ漁のしきといつた折々の風物をよりどころに、からうじて生き続けられる。復興まちづくりで新設される場所や建物を、これらの慣れ親しんだ風景や文化とどのように結びつけるかは、もっと議論されていいはずだ。〈風景〉とは未来の世代に手渡すものもあるのだから。

■南三陸を〈学びの場〉に。

——新たな価値観が育む〈風景〉

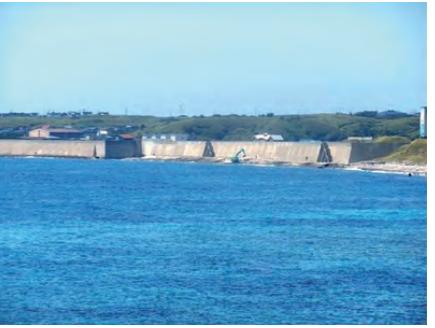
後藤一磨さんはさらに、「南三陸町は世界中の人々の学びの場になれる」と力説する。震災後の来訪者は東南海地域の方も多い。「言葉は実際の〈風景〉にかなわない。崩れた建物そのものが、その場に立つだけで無言で語りかける震災の生き証人。学ぶ現場をなくしてはいけない」と語る。

「我々が震災から学んだことは、人間は自然の許容する範囲でしか生きられないということ」という後藤さんが提案する学びの場は、被災現場にとどまらない。「自分たちが生きていることと自然との関係をすべて学べる」南三陸町を象徴するのが、樹齢四百年のタブの木を擁する椿島の自然林の植生だ。

椿島を覆うタブノキの群生を森の中から見上げると、木々の枝が競い成長して重なり合わずに、見事に空間を住み分けているのがわかる。互いに絶妙な間隔を保つ高層木の枝葉の隙間から陽光が零れ落ちて中層木、地面に降り注ぐ。川・沢はなくともふかふかの腐葉土の地面が雨露の水を貯える。島の森は周囲の海の豊かな漁場を守る「魚つき保安林」でもある。「成熟した森は争わない。森は人間社会のモデルになる」と後藤さんは話す。

「海は、海を見たい泳ぎたい人の海であり、牡蠣やワカメが餌を食べ、人間が、海鳥が漁をする海でもある。この言葉は、同時代に生きる私たち皆が自然とどう向き合い共存していくか、大きな問題を投げかける。ここに、震災を経験した南三陸町だからこそ生み出せる「新たな価値観」が育む、〈風景〉のヒントがあるに違いない。

（文化人類学研究 丹羽朋子）



北海道奥尻島の巨大堤防。高さは10mにもなるという。



「山の土が流れると、岩場に土がたまり、魚は卵をうめなくなる。海も汚れる。それで漁師が森づくりをした。」と後藤さん。



った“ものらしいのです。木片積木壁の単体としては面白いですが、寒い冬は風が通り抜け“こまつた”という評価は率直で思わず共感!。適材適所への移築再活用をハーバード大に伝えたい。／仮設の「さんさカフェ」で昼食。500円で本格的カレーに出会い感激。誰でも、高校生でも、500円のコインで、かなりおなかいっぱいになる上に実際にうまい。赤字というが皆に来てもらいたいから値上げせずがんばっている。ここは被災者による被災者のコモン。素敵な場。「ガレキの中にできたカフェ」という本はどうやら「さんさカフェ」が舞台の様子。カレーもお勧め。ご

本もお勧め。／地域の底力を知ろう。専門家たちよ!
地域のニーズに耳を傾けぬ不思議は慎もう。
私たちも心して…ね。

（渡邊喜代美）



買い物ツアーが お年寄りに大人気！ ～山梨県道志村の試み

山梨県道志村は古くから道志七里と呼ばれた山間の抜け道沿いの集落で、地形的には細長い村です。人口は2000人弱、村内に鉄道はなく公共交通機関はバスのみ、ほとんどの村民が自家用車で移動し、バスの便数は減り、高齢者や子どもは家族の送迎に頼っています。

そんなまちの課題を村民が役場と協働して解決していく「世代を超えて安心して暮らせる村づくり」プロジェクトが始まって4年。話し合いの中で買い物を頼まれることが良くあるという話が出て、買い物代行についても検討しましたが、役場に予算を立ててもらい、一人暮らしのお年寄りやお年寄りのみのご夫婦を対象に、役場のバスで村外のスーパー・マーケットや日曜大工用品のお店に行く「買い物ツアー」をすることにしました。

現在、ツアーを始めて1年半。参加された皆さんからの「楽しい」という口コミで、一躍人気に！沢山の商品から物を選べることもさることながら、ボランティアのメンバーが同行して、お昼には一緒におしゃべりしながらご飯を食べ、バスの中でもおしゃべりし、ちょっと寄り道してお花見だのに足を伸ばし、さながら「大人の遠足」のよう。一人暮らしで普段はあまり人と話さない人も身なりを整えてしゃっきりとした面持ちで参加。そんな外部から与えられるリズムや緊張感がお年寄りにとってはとても重要なこと。ちょっとした手助けがあればお年寄りは自分たちで楽しめます。道志村のお年寄りって何で幸せなんでしょう！今後、もっと自由に運営していくために、コミュニティビジネスにしていく？なんていう話も。

まちづくりって、そこに暮らす人一人一人がどう幸せに生きていくか現実の仕組みにしていくことだなあと思わせてくれる実例です。

(狩野三枝)



買い物ツアーの合間に
ひとやすみ

スイカを
食べながら



8月初旬の夏の日、ある仮設の集会所を訪れる途中のこと。立ち寄った志津川の果物屋さんにあったスイカがずしりと重く立派だったので、集会所に到着後みなさんといただくことにしました。スイカを食べながら、皆さん、震災当時のこと、今の暮らしのこと、これから暮らしのことなど、思い思いに話をされていました。1つのスイカがきっかけとなって、皆さんの思いの一部をうかがうことができた日でした。



(大橋徹平)

発行日：2012年8月1日
発 行：N P O 法人コレクティブハウジング社
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町3-21
ちよだプラットフォームスクウェア1175
電 話：03-3315-0255
メーリー：info@chc.or.jp

執筆・編集：C H C 南三陸町支援チーム
大橋徹平、狩野三枝、川上英里、
マーレン・ゴツイック、渡邊喜代美
協力：塩崎由人、丹羽朋子
■C H Cでは、以下の助成金により、この活動を推進しています。
平成24年度 独立行政法人福祉医療機構助成 福祉活動支援事業
助成事業名：持続可能なコミュニティづくり支援